

《吉岡実の詩の世界》ゲストブック [2005.11.7.-2003.4.14.]

《吉岡実の詩の世界》にアクセスいただき、まことにありがとうございます。

このゲストブックにコメントをご記入ください。

●渋谷のアップリンク・ファクトリー(UPLINK FACTORY)のギャラリーで《田村隆一 in Memorium》展(11月7日まで)を観た。11月5日、吉増剛造さんの朗読や城戸朱理さんたちのシンポジウムがあるが、あいにく時間がとれず、展覧会だけでも観ておきたかった。会場は店の一角の小さなスペースだが、生前の田村愛用のコートやマフラー、靴の展示があたかも吉江庄蔵の皮膜彫刻を観るようで、空虚のリアリティとでもいったものを醸していた。私は1970年代の末、早稲田大学の文学部から本部のキャンパスに向かう田村隆一を一度だけ見たことがある。取り巻きの学生を従えた田村は、反対側の歩道を行く者にも強烈な存在感を与えた。私は「詩人が歩いている!」と震撼したものである。展示では、書斎と思しい書棚を背にした写真に惹かれた。平凡社の《大百科事典》が写っており、これが例の百科事典かと感嘆久しうした。

小林一郎

, 日本 - Monday, November, 07, 2005 at 19:56:00 (JST)

●吉岡実に関係のない書き込みは削除しました。

小林一郎

, 日本 - Wednesday, November, 02, 2005 at 09:24:02 (JST)

●吉岡実の書簡について書くためにインターネットで検索していたら、玉英堂書店のサイトで吉岡実のハガキの画像がアップされているのに出会った。ちなみに《日本の古本屋》では書名「吉岡実葉書」で次の4件がヒットする。すなわち「吉岡実葉書／1枚／楠本憲吉宛 昭和38年6月18日 ペン10行／玉英堂書店 25,000円」のほか、「吉岡実葉書／1枚／鷺巣繁男宛 昭和42年8月15日 ペン10行／玉英堂書店 25,000円」、「吉岡実葉書／1枚／鷺巣繁男宛 昭和47年10月25日 ペン8行／玉英堂書店 25,000円」、「吉岡実葉書／1枚／鷺巣繁男宛 昭和54年5月4日 ペン7行／玉英堂書店 25,000円」である。《日本の古本屋》では画像表示のリンクがはられていないが、玉英堂書店のサイトで「吉岡実」を商品検索すると、以上の4点ともカラーのスクリーン画像が見られる（ハガキの文面が重要なのは言うまでもないが、吉岡の筆跡〔の変遷〕を知るための最良の資料である）。同サイトには10月29日現在、ほかにも岡崎清一郎宛ペン署名入《僧侶》（吉岡は「吉岡實」と署名、価格130,000円）などの画像があり、興味は尽きない。

小林一郎

, 日本 - Saturday, October, 29, 2005 at 18:39:12 (JST)

●このところ毎日、掲示板〈ゲストブック〉に無意味な英文の書きこみがある。見つけるたびに削除していたが、作業があまりに頻繁でばかばかしいため、しばらく〈ゲストブック〉を閉鎖する。トップページのリンク切れ（「指定されたファイルが見つかりません」というエラーメッセージが出る）はそのためなので、悪しからずご了承ください。〈ゲストブック〉は私にとって大切なページであり、いずれ機会を見て再開したいと思っている。

小林一郎

, 日本 - Wednesday, September, 28, 2005 at 18:30:49 (JST)

●吉岡実の詩篇〈サーカス〉(⑩・2)の初出情報を訂正する(〈吉岡実年譜〔作品篇〕〉ほか)。すなわち、今まで「《吉岡實詩集》〔書肆ユリイカ刊〈今日の詩人双書5〉一九五九(昭和三四)年八月一〇日〕としてきたのを「《實存主義》〔理想社〕一九五八(昭和三三)年九月〔一五号〕」と変更した。〈サーカス〉が刊本に初めて収録されたのは確かに《吉岡實詩集〔今日の詩人双書〕》(書肆ユリイカ、1959)なのだが、単行詩集はるか後年の《ポール・クレーの食卓》(書肆山田、1980)であり、その〈収録作品初出記録〉では〈ポール・クレーの食卓〉(⑩・1)、〈サーカス〉、〈ライラック・ガーデン〉(⑩・3)とも「ユリイカ版『吉岡実詩集』一九五九年」(同書、八六ページ)となっている。私は〈ポール・クレーの食卓〉と〈ライラック・ガーデン〉の二篇は雑誌掲載形を見ていたのでそちらを初出としたが、〈サーカス〉は今日まで雑誌掲載形未見のため、上記のような記載となっていた。《現代詩読本——特装版 吉岡実》(思潮社、1991)で年譜を編む際、〈サーカス〉の掲載誌について吉岡陽子さんにおたずねしたが、切り抜きなどは残っていなかった(おそらく《吉岡實詩集》収録時に入稿原稿として使用し、紛れてしまったのではないか)。先日、いつものように《日本の古本屋》で吉岡実関連の文献をチェックしていると、永楽屋から〈サーカス〉を掲載した《實存主義》15号が出品されているではないか(書誌情報自体、初めて知った)。すぐさま購入したことはいうまでもない(本文は《吉岡實詩集》掲載形と同じ)。ここに永年の懸案がひとつ、解決を見た。私の編んだ《吉岡実全詩篇標題索引〔改訂第2版〕》(文藝空間、2000)をお持ちの方は、〈サーカス〉の項(一九ページ)の初出を

▽《實存主義》(理想社)1958年9月(15号)

と訂正しておいてください。さて、何度も書いているので気が引けるが、詩篇〈横写——或はコート絵から〉(⑥・4)の初出情報が今もってわからない。どんな些細なことでもかまわないので、お知らせいただくとありがたい。

小林一郎

, 日本 - Thursday, September, 15, 2005 at 12:19:07 (JST)

●《ty_web_space》というサイトに〈僧侶〉のイラストレーションが吉岡実の詩とともに掲載されている。そこに「今回の Gallery2 暗黒の祝祭 では、吉岡実の「僧侶」を中心に、全篇に闇が漂う作品集にしました。〔堀口大学の〕「秘密」と「灰の水曜日」を除いてほとんど黒一色で描かれています」とあるように、モノクロームの世界が展開されている。作者は「この「僧侶」という作品に絵をつけたいという欲望は、きっとこの詩が生まれた昭和 30 年台から多くあったのではないかと思います。もし、このような作品を御存知の方、教えていただだけませんか？」と書いているが、寡聞にして〈僧侶〉をヴィジュアル表現した作品をほかに知らない。

小林一郎

, 日本 - Monday, September, 12, 2005 at 15:31:18 (JST)

●9月30日の定期更新に向けて、詩集《夏の宴》解題を執筆した。この詩集は引用をちりばめた内容もさることながら、その姿形が印象的である。インターネットで「夏の宴+吉岡実」を検索してみたら《Culture to Future vol,1 the '60s トーキョー・アングラシーンの夜明け 夏の宴》に《夏の宴 [特装版]》の美しい書影が掲載されていた（以前に触れた玉英堂書店在庫の一本と同じ五番本か）。そのサイトマップには「各分野の素晴らしいクリエイターたちが都市のアンダーグラウンドに群雄割拠し、混沌とした輝きを放ったこの 60 年代」の重要人物が紹介されているが、吉岡実と関わりの深い人も多い。

小林一郎

, 日本 - Sunday, September, 11, 2005 at 14:41:12 (JST)

●地域の公共図書館のインターネット予約を活用している。もっぱら中野区・練馬区・新宿区の区立図書館を利用しているが、借り出して読みたい本の大半はまかなえる。これらの図書館の蔵書検索のページは、《NDL-OPAC》や《日本の古本屋》と並んで資料探索のツールとして欠かせない。ちなみに8月21日、練馬区立図書館から借りたのは次の7冊。石原慎太郎《光より速きわれら》、石川啄木《一握の砂》と堀口大学《月下の一群》の復刻版、《世界童謡集》、《白秋全集 29》、小畑雄二《えきいんさん》・《ぶんぼうぐやさん》（最後の2冊は友人が書いた子供向けの本）。

小林一郎

, 日本 - Monday, August, 22, 2005 at 22:29:13 (JST)

●8月の日経新聞《私の履歴書》は篠田正浩が執筆中だが、第16回〈寺山修司〉に土方巽が登場する。「脚本を書いている間も寺山は友人を誘った。自分が旅館に流行作家のように缶詰にされている姿を見せびらかしたかったにちがいない。しかしその中で異彩を放ったのが舞踏家の土方巽である。長々と座敷に横たわって、寺山と東北弁で現代舞踏の世界を語る光景は偉観であった」。脳髓が痺れそうな状景である。

小林一郎

, 日本 - Wednesday, August, 17, 2005 at 09:52:46 (JST)

●先日、伊豆・今井浜の海に行った。一冊の本も持たないのは不安なので、角川文庫版《西東三鬼句集》を携えた。句集《旗》《現代俳句》《夜の桃》《今日》《変身》を底本にしたもので、「一部再収載されている作品もあるが、句集の原形を保つ意味から、そのままの形を残した。句形、用字についても同様である」

ゲストブック（閲覧者のコメント記入用）[2005.11.7.-2003.4.14.]

《西東三鬼句集》、角川書店、1965、二八四ページ）と〈編集後記〉にあるのは見識である。

小林一郎

, 日本 - Friday, August, 12, 2005 at 22:11:52 (JST)

●新たに一篇、吉岡実の未刊行散文を発見した。題して〈五月の句——耕衣の句から〉。岸田稚魚（1918-1988）主宰の俳句雑誌《琅玕》1983年5月号の巻頭エッセイである。「五月の句」は連載記事のタイトルだから、吉岡が付けた標題は「耕衣の句から」だろう。吉岡自身の編んだ《耕衣百句》（コーベブックス、1976）、「この一冊から、私は「春の句」を抽出してみよう」（同誌、二ページ）と、永田耕衣の句16を400字詰原稿用紙3枚強に鏤めた俳句＝書物随想である。

小林一郎

, 日本 - Tuesday, July, 19, 2005 at 15:02:22 (JST)

●7月16日、アクセスカウンターの数値が10,000を超えた。最多訪問者は間違いなく私自身だが、新しく原稿を書くため詳細に見ていくと、記述の矛盾に出会うことがある。先日も《吉岡実年譜〔作品篇〕》と《吉岡実未刊行散文集初出一覧》で食いちがいを発見し、次の定期更新時に修正した。こうした予期せぬことがあるので、本サイトの記述を参照される場合、（以前にダウンロードしたファイルではなく）必ず最新のファイルをご利用くださるよう、切にお願いしたい。

小林一郎

, 日本 - Saturday, July, 16, 2005 at 21:21:24 (JST)

●城戸朱理さんから《城戸朱理のブログ poetry and diary》を開設したというメールをいただいた。さっそく訪問してみると、7月6日に開設されたばかりで、11日には〈吉岡実のエッセイ〉という記事がアップされている。それによれば、城戸さん編の吉岡実エッセイ選《突堤にて》（仮題）が思潮社の〈詩の森文庫〉の1冊として刊行される予定だ、とある。《現代詩手帖》7月号にも《突堤にて》は「〔死見〕という絵」《土方巽頌》《うまやはし日記》から吉岡実氏の目のつよさをまざまざと感じさせる散文を抄録した」（二一五ページ）とあり、吉岡実散文の精髓として今から期待が高まる一方である。

小林一郎

, 日本 - Monday, July, 11, 2005 at 21:46:00 (JST)

●7月10日、東京ビッグサイトで《東京国際ブックフェア2005》を見た。自然科学書コーナーに吉岡実がかつて勤務した南山堂の書籍が並んでいた。南山堂単独の出版目録はなかったので、2005年3月発行の《医学書総目録》（日本医書出版協会）を見ると、南山堂の出版物に鎌田武信編《新内科書》（1996）がある（本書は呉建・坂本恒雄、冲中重雄と続いた《内科書》の系譜に連なるものか）。元医学書院社長で森鷗外研究者の長谷川泉さんに南山堂について尋ねる機会があったが、医書出版の名門ということだった（長谷川さんは昨〔2004〕年、86歳で亡くなられた）。吉岡実が勤務した南山堂や西村書店、香柏書房などの出版社についても、しかるべき準備をしてから書きたいと思う。

小林一郎

, 日本 - Sunday, July, 10, 2005 at 20:00:06 (JST)

●小澤實さんが主宰する俳誌《澤》が創刊5周年を迎え、記念祝賀会が6月25日、神田の学士会館で開かれた。小澤さんや旧知の宗田安正さん、平出隆さんにご挨拶することができた。吉岡さんが存命なら必ずや出席されただろう。俳句の話はもちろん、骨董のことなどされたのではないだろうか。時を同じくして《澤》5周年記念特集号、小澤さんの第三句集《瞬間》（角川書店、2005年6月25日）と《小澤實集》（邑書林、同）が出た。句集《瞬間》から4句引く。

蓬萊をこぼるるものなかりけり
崑崙へ一騎急げる董かな
天高し頑と出でざる探求書
田荷軒永田耕衣先生
大鯨深みに消えしのみならん

意図的に吉岡実絡みの句を選んだが、最後は永田耕衣追悼句（なお《瞬間》のジャケットには、厚く緑青がふいた銅製の経筒の蓋がカラーで掲載されている）。そして《小澤實集》から。

ふはふはのふくろふの子のふかれをり（《砧》）
無花果割る親指根元まで入れて（《立像》）

小林一郎

, 日本 - Saturday, June, 25, 2005 at 23:37:51 (JST)

●塚本邦雄氏が去る六月九日、八四歳で亡くなった。吉岡実は〈二人の歌人——塚本邦雄と岡井隆〉（一九八五年一〇月の《短歌春秋》創刊号〈一首百彩〉掲載）を「同時代の歌人として、私をもっとも注視するのは、やはり塚本邦雄と岡井隆ということになるだろうか」（《「死児」という絵 [増補版]》筑摩書房、1988、三四〇ページ）と始めている。そして、塚本の師である前川佐美雄の歌業に触れたあと、塚本の歌集《装飾楽句》（作品社、1956）から四首を引いている。その冒頭は

水に卵うむ^{かげろう}蜉蝣よわれにまだ悪なさむための半生がある

一方、塚本邦雄は吉岡実の詩（とりわけ詩集《僧侶》の詩篇）についてたびたび書いているが、《私のうしろを犬が歩いていた——追悼・吉岡実》（書肆山田、1996）掲載の〈誄讃〉一二首が吉岡に寄せた最後の作品だと思われる。最初と最後の歌を掲げる。

^{まくなぎ}蟻の黒き渦なすひんがしへ奔らう 魚藍忌は明日のはず
世の末の夏末つ方詩歌よりいささ冴えつつ紫紺野牡丹

あれは一九八〇年前後だったろうか、東京・赤坂の銀花ギャラリーで年に一度、塚本邦雄筆趣展が開かれていた（色紙や短冊、新刊等の展示即売会である）。私は文藝空間の原善と語らって、塚本が来場していそうな日に訪れ、拝顔の榮に浴したものだ。ギャラリーには、高柳重信や葛原妙子もふらりとやってきた。塚本本の装丁者・政田岑生さんが、手ずから蜜柑をむいて勧めてくれたことも思い出される。その高柳、葛原、政田氏も今はなく、塚本邦雄もまた逝った。

少年発熱して去りしかば^{はつなつ}初夏の地に昏れてゆく砂絵の麒麟（《装飾楽句》）

小林一郎

, 日本 - Sunday, June, 12, 2005 at 12:02:11 (JST)

●5月10日、細江英公の写真集《鎌鼬》が青幻舎から限定500部で刊行された（本体・ジャケット・函を完全復刻したという）。税込価格31,500円也は半端な金額ではないが、A3判変型・41シートの大振りな本書を繰っていると、納得できる。土方巽の歿後、アスベスト館で何度かフィルム上映会が開かれたが、いつだったか、テントのような受付の一角に限定1,000部の元版《鎌鼬》（現代思潮社、1969）が置かれていた。なにやら禍禍しい感じで、人が手にするのを後ろから覗きこんで観た覚えがある。元版《鎌鼬》との出会いである。

ゲストブック（閲覧者のコメント記入用）[2005.11.7.-2003.4.14.]

小林一郎

, 日本 - Friday, June, 10, 2005 at 16:05:03 (JST)

●田島征三・谷川晃一・宮迫千鶴の三人展〈海・山・のんびりアート〉(練馬区立美術館、6月12日まで)を観た。3人の「絵画・絵本原画・立体作品など初期から現在にいたる代表作など合わせて約270点の作品を一同に展示」したもので、目にも鮮やかな色彩の乱舞に心洗われるひとときだった。ところで、谷川晃一氏は土方巽が演出・出演した高井富子舞踏公演〈形而情学〉(吉岡実が詩篇〈青い柱はどこにあるか?〉を寄せている)の美術担当者だが、今回、舞台美術関連が出品されていないのは残念だった。

小林一郎

, 日本 - Saturday, May, 28, 2005 at 17:22:53 (JST)

●フラン・オブライエン、大沢正佳訳《第三の警官》(筑摩書房、1973)を読んだ。吉岡実が愛読し、版元から取りよせて城戸朱理さんに一本贈ったといういわくつきの小説である。自転車をめぐる奇想小説という見方が一般的だが(吉岡の〈僧侶〉や〈自転車上の猫〉も想起される)、《吉岡実の詩の世界》の作者としては「ところでぼくが打ち込んできた「ド・セルビィ研究目録」決定稿がついに完成しました。これはかの賢者の人と作品のあらゆる面についてこれまでに発表された諸見解をあますところなく調査照合したものです」(同書、一三ページ)というあたりに傍線を引きたい。

小林一郎

, 日本 - Wednesday, May, 25, 2005 at 16:37:04 (JST)

●5月8日、神田の東京古書会館で大貫伸樹氏と林哲夫氏の対談を聞いた。対談は、大貫氏のコレクションを126点展示した《1920—30年代の装丁——関東大震災後15年間は装丁史のベルエポック》展のトークショーで、題して〈佐野繁次郎の装丁〉。林さんからは本サイト開設早々、拾遺詩集《ポール・クレーの食卓〔私家版〕》の写真をお送りいただいたが、これまでお目にかかる機会がなかった。対談終了後、ご挨拶し、改めてお礼を述べた。〈吉岡実の装丁作品〉をご覧いただいているとのこと。吉岡実装丁を全点(約150点)紹介できるのはいつだろう。

小林一郎

, 日本 - Monday, May, 09, 2005 at 10:04:00 (JST)

●4月30日の定期更新をした。リンク切れしているURLポップアップ[《吉岡実の詩の世界》ページ間の移動...]を全面的に書き換えたが、あいかわらず不調だ。原因が判らないだけに、対応に困る。ページ間の移動は、ご面倒でもトップページを起点にさせていただきたく願います。

小林一郎

, 日本 - Saturday, April, 30, 2005 at 12:27:41 (JST)

●俳人の藤田湘子氏が4月15日、亡くなった。79歳だった。《馬酔木》の水原秋櫻子に師事。1964年に《鷹》を創刊主宰し、吉岡実が若い俳人として信

頼する小澤實さんらを育てた。湘子は1972年10月号の《鷹》の座談会〈現代俳句＝その断面〉に吉岡とともに出席している（他の出席者は佐佐木幸綱・金子兜太・高柳重信）。その《湘子後記》の一節に「吉岡さんは土、日曜に詩作されるそうで、この日も土曜日だったため、あまり期待しないでくれということだったが、わざわざ時間をさいて下さった。編集部の熊木、永島両君も席にいたが、ずっと以前から吉岡ファンの永島さんは、吉岡さんが見えたら、ぼっと上気したようだった」（同誌、三五ページ）とある。

小林一郎

, 日本 - Saturday, April, 16, 2005 at 17:31:20 (JST)

●今日は吉岡実生誕86周年である。日本の古本屋で吉岡実の著作を検索したら、堀切の青木書店（代表者：青木正美氏）が《薬玉》《静かな家》《夏の宴》《サフラン摘み》《吉岡実詩集〔思潮社版〕》《神秘的な時代の詩》《紡錘形》《僧侶》《「死児」という絵》《魚藍〔新装版〕》《静物》《異霊祭》《吉岡実詩集〔今日の詩人双書5〕》《ポール・クレーの食卓》《吉岡実詩集〔現代詩文庫14〕》《魚藍》と多数のタイトルを掲載している。作品の価値・稀少性からいけば、私家版限定200部の詩集《静物》が随一だろう。献呈署名入で126,000円とある。吉岡実が誰に宛てた一本であろうか。

小林一郎

, 日本 - Friday, April, 15, 2005 at 12:21:34 (JST)

●巖谷國士氏の《澁澤龍彦考》（河出書房新社、1990）について書くため、巖谷さんの新刊《封印された星——瀧口修造と日本のアーティストたち》（平凡社、2004年12月5日）を読んだ。本書でとりわけ面白かったのが〈瀧口修造小事典〉である。いつの日か〈吉岡実小事典〉を書くことがあれば、ぜひとも参考

にしたい。心覚えのために項目名を引かせていただく。「富山／姉たち／美術少年／文学少年／医業／写真／三田文科／小樽／西脇順三郎／同人誌／アンドレ・ブルトン／シュルレアリスム／アルチュール・ランボー／夢／映画／瀧口綾子／マン・レイ／マックス・エルンスト／ジョアン・ミロ／サルバドール・ダリ／マルセル・デュシャン／戸坂潤／詩画集／芸術運動／読売アンデパンダン／タケミヤ画廊／実験工房／西落合／オリーヴ／ヨーロッパ／パリ／デッサン／デカルコマニー／バート・ドローイング／吸取紙／ロト・デッサン／オブジェ／ローズ・セラヴィ／手紙／リパティ・パスポート／言葉の遊び／千円札事件／一九六〇年代／諺／アリス／ニューヨーク／装幀／ステッキとレインコート／声／煙草／墓所」（同書、七四～八七ページ）。西脇順三郎やアリスなどいくつかの項目は、〈吉岡実小事典〉にもそのまま登場しそうである。

小林一郎

, 日本 - Sunday, April, 10, 2005 at 17:18:27 (JST)

吉岡実の詩が好きな僕。こちらのサイトはとても興味深く拝見させていただきました。吉岡実の詩は後世に残ると思う。また、作成者の小林さんにはただただ脱帽するばかりです。彼が俳句をやっていたとは……。気になります。何かの本で、自分の詩を彼が連句のようなものと言っていたのを思い出しました。

たく（高校生）

, 大阪 日本 - Saturday, March, 12, 2005 at 10:57:58 (JST)

●探求書の情報を簡便に得られるのがインターネット検索の利点だが、それでもわからない本はある。吉岡が「未知の人から贈られた『骰子一擲』で、私は

初めて、この難解なる詩篇を読んだというより、見たのだった。いつ頃のことなのか、伊藤裕一郎訳の小冊子には、発行年月も発行所も明記されてないので、わからない」と書いているマラルメの訳書である。ほかにも解題に「★未詳」とある資料の書誌を求めている。どんな情報でもかまわないので、ぜひお寄せいただきたい。

小林一郎

, 日本 - Monday, February, 28, 2005 at 01:45:57 (JST)

●《吉岡実言及書名・作品名索引〔解題付〕》を更新した。ようやく《「死児」という絵》全篇の索引化が終わったことになる。作業に予想外の時間がかかったので、今回（2005年1月末定期更新）は著書解題を休載する。

小林一郎

, 日本 - Wednesday, February, 02, 2005 at 08:55:50 (JST)

●《椿實の書架》を運営する椿紅子さんからメールをちょうだいした。〈「吉岡実」から「吉岡実」へ〉をお読みいただいたらしく、椿實／椿実のことにも触れられていた。椿さんは小説家・椿實（1925-2002）の長女で、サイトには《椿實全作品》（立風書房、1982）を補完する作品や書誌的資料がアップされている。このコンテンツは冊子《椿實の書架》（皓星社、2003）としてまとめられており、《椿實全作品》の読者には必備の内容となっている。

小林一郎

, 日本 - Tuesday, January, 25, 2005 at 19:54:46 (JST)

●《吉岡実言及書名・作品名索引〔解題付〕》を更新した（しばらくは毎月更新することになるだろう）。〈吉岡実が読んだ本——断章ふうに〉でも触れたが、吉岡は夥しい書名・作品名を随想中に書きのこしている。的確な引用文がちりばめられていることも多い。これらを手がかりに吉岡が読んだ書籍や作品を味読していくことは、心躍る作業である。書誌を参照した結果は取捨選択して、私自身を含めて吉岡実の読書遍歴をたどる者にとって有益なページとしたい。

小林一郎

, 日本 - Saturday, January, 08, 2005 at 10:00:53 (JST)

●荒井美三雄企画・監督によるDVD《土方巽 夏の嵐 燐犧大踏鑑 2003-1973》（ダゲレオ出版）が出た。踊る土方巽（映像のシューティングはこの舞台が最後）を伝える貴重な作品である。《土方巽頌》を読むかぎり、吉岡実はこの1973年6月の京都大学西部講堂における公演を観ていないようだが、同年9月の《静かな家》は観ている（私には両者がよく似ているように想えるものの、詳しいことはわからない。「舞踏とは消えていくから形がのこる」（土方巽）。

小林一郎

, 日本 - Friday, December, 31, 2004 at 12:33:55 (JST)

熊本城の近くを歩いていたら、厩橋を発見した。
今度、厩橋（東京）のことを調べて書きたい。

小林一郎

, 日本 - Sunday, December, 05, 2004 at 20:02:32 (JST)

出張で熊本に来ている。熊本空港のインターネットコーナーで操作してみるも、あいかわらず URL ドロップダウンメニューが不調だ。定期更新時に html を書き換えてみるのだが、うまくいかない。ご面倒をおかけするが、トップページに戻って、そこから各ページに進んでいただくしかない。

小林一郎

, 日本 - Wednesday, November, 24, 2004 at 18:00:05 (JST)

どなたかに、フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』の〈吉岡実〉のページに、「外部サイト」として本サイトへのリンクを張っていただいた。ありがたいことだ。Wikipedia には、H 氏賞のページも書いてみた。いずれ高見順賞と藤村記念歷程賞のことも書きたい。

小林一郎

, 日本 - Friday, November, 12, 2004 at 16:18:44 (JST)

〈編集後記 24〉に書いたように《吉岡実言及書名・作品名索引〔解題付〕》を執筆・制作中だ。ご期待いただきたい。

小林一郎

, 日本 - Friday, November, 05, 2004 at 10:09:09 (JST)

● Wikipedia に〈吉岡実〉のページを作成

フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』に〈吉岡実〉のページがなかったので、本サイトの内容を凝縮して新しくページを作成した。ぜひご覧いただきたい。記事の書きこみにあたって「あなた自身やあなたのウェブサイト、製品、また仕事を宣伝する項目を作らないで下さい」という注意書きがあったので、(Wikipedia から見れば) 外部サイトである本サイトへのリンクを張っていないが、訪問者は適宜、〈吉岡実〉の記事を編集したり「外部サイトへのリンクを張って」いただきたい。

小林一郎

, 日本 - Friday, October, 15, 2004 at 12:43:30 (JST)

この《吉岡実の詩の世界》ゲストブックが、当方の作業ミスでしばらく書きこみ不能の状態だった。お詫びいたします。というわけで、ようやく無事に復活した。

お気づきの方もいると思うが、ここに書いたことで長く残しておきたいコメントは適宜《吉岡実の詩の世界》の〈編集後記〉のページに移している。そちらの方も、ぜひお読みいただきたい。

小林一郎

, 日本 - Friday, October, 01, 2004 at 15:58:16 (JST)

〈吉岡実の未刊行詩三篇を発見〉を書いた。
新資料の紹介文、ぜひお読みいただきたい。

小林一郎

, 日本 - Wednesday, June, 30, 2004 at 10:34:53 (JST)

ゲストブック（閲覧者のコメント記入用）[2005.11.7.-2003.4.14.]

《静物》以前に吉岡実が発表した詩二篇と皚寧吉の筆名で発表した詩一篇が、GHQが収集した雑誌から発見された（このサイトを開設して以来、最大のニュースである）。これで吉岡実が生前に発表した詩は、計二八四篇になった。詳しい紹介文は五月末の定期更新に間に合わず、まず〈吉岡実年譜〔作品篇〕〉の一九四七年と一九四八年の項に初出の情報を掲載した。

小林一郎

, 日本 - Monday, May, 31, 2004 at 01:53:39 (JST)

2004年4月15日、吉岡実生誕85周年の日。
今朝の東京は久しぶりの快晴で、まさに
「(覆された宝石)のような朝」だった。
今日は《吉岡実全詩集》を開くことにしよう。

小林一郎

, 日本 - Thursday, April, 15, 2004 at 10:44:00 (JST)

このほど（一昨日）アクセス数が3000を越えた。
いつも持ち歩いている小さなノートには、
《吉岡実の詩の世界》の企画が満載されている。
少しでも多くその実現に力を注ぎたい、と思う。

小林一郎

, 日本 - Thursday, February, 19, 2004 at 19:47:40 (JST)

moondialさんの〈吉岡実と餃子ライス〉を読みました。
心温まる文章でした。moondialさん、どうもありがとう。
たまたま先週、神保町に行ったときも餃子定食を食べました。
正午前だというのに、スイートポーツの前には列ができていました。
時間がなくて、ラドリオのウイナコーヒーが飲めず、残念。

小林一郎

, 日本 - Tuesday, February, 03, 2004 at 11:12:13 (JST)

最近ウェブサイトを開設し、吉岡さんについてちょっとした駄文を書こうと思
い、ウェブ上で資料があるか検索サイトで調べたところ、こちらのサイトにた
どり着きました。大変な労作で、こうして公開・維持し、私のような者でも参
考にさせていただけるようにくださっていることに感謝します。

文末で参考資料を列挙するフォーマットで書いているため、そこで小林さんの
このサイトへのリンクを張らせていただきました。

以上、御礼とリンクのお知らせまで。今後とも寄らせていただきます。

moondial 拝（ハンドルネームにて失礼いたしました）

moondial

, 日本 - Tuesday, February, 03, 2004 at 01:14:28 (JST)

1 月末の定期更新のために、神田・神保町で資料を探した。
どうにか目処が見ついたので田村書店を見ると、初版《静物》があった。
〈吉岡実詩集の基本版面〉を書いた直後だっただけに嬉しかった。
署名は無いそうだが、売価は 12 万円だった。
吉岡実の単行詩集としては、戦前の《昏睡季節》《液体》に次いで
入手しにくい本だろう。

小林一郎
, 日本 - Thursday, January, 29, 2004 at 17:01:34 (JST)

2004 年を迎えました。
本年も《吉岡実の詩の世界》にご期待ください。
論考と資料の両面で、いっそう精進いたします。

小林一郎
, 日本 - Thursday, January, 01, 2004 at 01:31:15 (JST)

本サイトを開設して 1 年が経った。いましがたアップした全ページをプリント
しおわったが、半日かかってしまった。ふだんは追加・修正した部分だけを出
力して保存しているので、これほどのボリュームになるとは思わなかった。と
ころどころ、リンクに不備があったのにも気がついた。たまにはすべてのペー
ジを覗いてみるものだと痛感した。

小林一郎（サイト作成者）
練馬, 東京 日本 - Sunday, November, 30, 2003 at 18:50:00 (JST)

来る 11 月末日にサイト開設一周年を迎える。
特別な企画は用意していないが、書影を中心に、
写真の大半を再撮影して、見やすくする予定だ。
ぜひともご期待いただきたい。

小林一郎（サイト作成者）
, 日本 - Sunday, November, 16, 2003 at 19:47:37 (JST)

本サイトを開設して 4 箇月たった 2003 年 3 月の
定期更新のときにカウンターを設置したが、ここ
めでたく、閲覧者の数が 1000 を突破しました。
今後とも、新しい記事の掲載に努力する所存です。

小林一郎
, 日本 - Monday, August, 11, 2003 at 00:02:13 (JST)

2003 年 8 月 4 日（月）夜から、プロバイダのシステム障害のため、
このページの閲覧ができない状態が続いていました。
8 月 7 日（木）朝〔書きこみしている時点〕には復旧していました。
ご迷惑をおかけいたしましたこととお詫びいたします。

小林一郎
, 日本 - Thursday, August, 07, 2003 at 09:22:33 (JST)

先日、日本近代文学館で吉岡実詩集《静物》の稿本を閲覧した。

ゲストブック（閲覧者のコメント記入用）〔2005.11.7.-2003.4.14.〕

吉岡自筆の入稿原稿（印刷のための草稿）である。
稿本の概要を 2003 年 7 月末の定期更新時にアップしたい。

小林一郎

, 日本 - Tuesday, July, 15, 2003 at 11:06:36 (JST)

web サイト『日本ペンクラブ：電子文藝館』

<http://www.japanpen.or.jp/e-bungeikan/index.html>

の「招待席」に吉岡実の詩「僧侶」「苦力」が掲載されました。
1958 年刊の詩集『僧侶』から、二篇の抄出です。

小林一郎

, 日本 - Tuesday, July, 08, 2003 at 09:16:03 (JST)

雨の命日。こんな早くに、台風だという。
今日は残念ながら、所用で墓参ができない。
更新したページをプリントして校正しよう。
新倉俊一さんの西脇／パウンドを読んでいる。

小林一郎

, 日本 - Saturday, May, 31, 2003 at 15:12:17 (JST)

●吉岡実遺愛の奠雁を展示

2003 年 5 月 1 日～ 10 日、東京・有楽町の「織田有（ODAU）」で
吉岡実が生前、毎朝撫で摩り愛蔵した奠雁が展示される。

http://www.marunouchi.com/search/cgi/maps/one.cgi?type=building_search&bid=526&shopid=774&category=2

《吉岡実の詩の世界》の〈最近の〈吉岡実〉〉でもご案内の予定。

小林一郎

, 日本 - Friday, April, 25, 2003 at 14:03:29 (JST)

吉岡実句集《奴草》が刊行された。

吉岡の生誕 84 周年にあたる 4 月 15 日、書肆山田から。
私は池袋のぼえむばろうで購入した。
これからじっくりと読みふけりたい。

小林一郎

, 日本 - Wednesday, April, 16, 2003 at 12:02:14 (JST)

《吉岡実の詩の世界》の作成者の小林です。
このページをご覧いただき、ありがとうございます。
ご感想やご要望など、自由にお書きください。
ページ作成の参考にさせていただきます。

小林一郎

練馬, 東京 日本 - Monday, April, 14, 2003 at 12:40:58 (JST)

[2012年10月31日追記]

以上は、ウェブサイト《吉岡実の詩の世界——詩人・装丁家吉岡実の作品と人物の研究》のゲストブック（2003年4月から2005年11月まで公開）への書き込みのすべてである。《吉岡実の詩の世界》の作成者の作業日誌のようで、お恥ずかしいかぎりだが、そのときでなければ書けない熱を帯びていることもまた確かだ。2005年9月28日の記載にあるとおり、ゲストブックをいったん閉鎖して様子をみながら再開したあとも、吉岡実と無関係な英文による書き込みが減らないため、最終的に閉鎖した。それ以降、ゲストブックのhtmlファイルはローカルの作業用フォルダに眠りつづけていたが、今回、InDesignによる吉岡実関連資料の復刻プロジェクトの一環として、PDFファイルを公開するに至った。原文のルビを通行の形にして、常用漢字以外をいわゆる康熙字典で表示したほかは、ゲストブックのhtmlと同じ内容である。なお、文中のウェブサイトの名称やURLは執筆当時のものであり、現在はサイト名が変更されていたりサイト自体がなくなっていたりするものも多い。過去のある時期の記録ということに免じて、どうかその点はお許しいただきたい。

《吉岡実の詩の世界——詩人・装丁家吉岡実の作品と人物の研究》作成者 小林一郎

[付記]

2005年9月12日（04ページ）に「寡聞にして〈僧侶〉をヴィジュアル表現した作品をほかに知らない」と書いた時点では未見だったが、その後、2004年3月号《小説すばる》掲載の皆川博子の短篇小説〈塔〉（題辭に〈僧侶〉第6節が引かれている）に宇野亞喜良が装画を描いていることを知った。そこでは、皆川の文が〈僧侶〉からインスパイアされたのと同様あるいはそれ以上に、宇野の絵が〈僧侶〉からインスパイアされていて、スリリングだ。皆川博子《絵小説》（集英社、2006）に初出と同じ絵柄（カラー・モノクロ各1点）が収録されているので、ご覧いただきたいと思う。